

院長 田 聞 く

この病院

三浦病院
三浦 健院長

動脈内注入化学療法で 痛みがとれ延命率アップ 患者さんのQOL向上に貢献

取材・文◎松井壽一
医療ジャーナリスト
撮影◎早坂 明



● 治療の対象と されないような 肝がんや膵がんに希望

三浦病院は東京・池袋駅から東武東上線の準急で7つ目のみずほ台駅が最寄りである。そこからタクシーで約6分。急行で4つ目の志木駅からは東武バスがあり、下南畑行きか富士見高校行きに乗り「下南畑」で下車すると目の前に三浦病院がある。所要時間は約20分。

1990（平成2）年4月に開院した三浦健院長にお話をうかがった。

手術不能のがんがある。それ

をミサイル療法で治療する。とても良い結果が得られ、患者さんに喜ばれる。三浦先生が実践しているこの動脈内注入化学療法を説明するには、三浦院長自身が進んできた歴史を辿ってみなければならぬ。

1954（昭和29）年に東京大学医学部を卒業、横浜や座間のアメリカ陸軍病院でインターンの実地修練を受け、55年に大学へ戻る。外科（木本誠一教授）の医局へ入ったが、63年から3年間フルブライト留学生としてポストンへ赴く。

当時大腸がんの多いアメリカでは、大腸がんの手術後に頻発

する肝転移が大問題となっていた。

「血管外科の進歩と共に肝動脈へカテーテルを留置して、体外ポンプで肝臓へ選択的に抗がん剤を注入する動脈内注入化学療法がポストンで始まったところでした。その時にワトキンス博士の研究室で行った動注ポンプの研究が尾をひいて今日まで続いているということです」

1975（昭和50）年、都心の麹町に土地を得て3人で40床の病院を開いた。本誌の昨年4月号で紹介した半蔵門病院で、現在の灰田公彦院長は義弟にあたる。



松井壽一◆まつい・じゅいち
1936年東京生まれ。業時時報社記者、編集局長、取締役を経て、現在、フリーの医療ジャーナリスト。医学ジャーナリスト協会副会長。本誌にて「空蟬橋」を連載し、好評のうちに2001年5月号で最終回を迎えた。

「胃がん、大腸がん、痔核などの切除手術と共に、切除不能の肝がん、膵がんの動注化学療法に情熱を燃やして4500例の手術例を重ねました。肝がんと膵がんは切除不能の場合が多く、従来内科でも外科でも治療の対象とされていませんでした。しかし動注化学療法を行うと、大きながんも意外と小さくなり、患者さんの苦痛もとれかなりの延命を得る例が少なくないことを経験しました。これは進行がんの治療に取り組む医師のひとりとして最高の喜びでした」

今から12年前、縁あって富士見市に三浦病院を開設した。

現在、ベッド数は101床で利用率80%。外来患者数は1日平均約130名。平均在院日数は17・8日である。医師19名(常勤4名)、正看護師28名、准看護師18名、看護助手20名、薬剤師2名、放射線技師3名といった陣容。院外処方せんを発行している。

●9年間で2000症例以上 集学的治療で さらに延命率向上へ

局所の栄養動脈にカテーテルを挿入して抗がん剤の選択的注入化学療法を行うと、抗腫瘍効果が大きく、延命効果を得る例も多い。

当初の注入ポンプは、ワトキンス博士が考案したねじ巻き時

計式であった。このポータブル型ポンプは、ねじを巻くことによりローターが1時間で1回転し、0・2ccの抗がん剤を動脈に送り込む。1日だと24回転して5cc送り込む。薬はポンプに25cc入るので満タンにしておくと5日間もち、寝ている間も抗がん剤は肝臓なら肝臓のがん細胞に集中して入っていく。

「抗がん剤は5-FUとマイトマイシンです。タンクに5-FUを詰めておきます。この薬剤をじっくり時間をかけて投与すると、DNAの合成をブロックし、核酸の合成を抑制して細胞分裂を抑えます。言ってみればがんを兵糧攻めにするわけですね。マイトマイシンのように濃度依存性の強い薬剤は、横から火炎放射器のようにワンショットでぶっ放すほうがいい。この両薬剤の併用で効果がかなり増します」

このタイプのポンプは体外に取りつけるものだったが、1980年代にアメリカの宇宙開発産業が体内へ埋め込むことのできる動注ポンプを開発した。動力源はねじ巻き式のゼンマイや電池ではなく、なんと人間の体温を活用するというもの。

ポンプは2層のタンクになっていて底のほうには摂氏37℃が沸点の特殊なフロンガスの液体が入っている。体温で温められたフロンが気化して容積が膨張すると、蛇腹のタンクを押し

し上げ、上のタンク内の5-FUが動脈の中に注入されるという仕組みである。

「タンクの容量は50ccですから、10日経ったら皮膚の上からタンクの中に針を突き刺して抗がん剤を満タンにします。そうすると下のタンクのフロンガスは圧縮されて再び液状になり、半永久的に使えます」

1990年から、手術で直接局所の動脈にカテーテルを挿入する方法を中止し、セルジンガー法でレントゲン透視下に大腿動脈から局所の動脈へカテーテルを誘導し、ポートの埋め込みを行う方法に切り換えている。インターベンショナル・ラジオロジーの進歩で、小さな侵襲で容易に的確に動脈内注入ができるようになった。

薬剤は5-FUとマイトマイシンCの動注だけでなく、ADM(アドリアマイシン)やEPI(アドリアマイシン)やEPI-ADM(ファルモルピシン)も併用し、肝がんではリピオドール化学塞栓も併用している。

1992～2000年に動脈注射化学療法を行った症例は2063例。内訳は肝細胞がん413、転移性肝がん653、膵臓がん318、胆管がん86、胃がん149、結腸がん・直腸がん149、卵巣がん・子宮がん・前立腺がん91、乳がん111、頭頸部がん86、肺がん7である。

「動注化学療法に温熱療法、

放射線療法、冷凍療法などを加味して集学的治療を行えば延命率がぐっと向上します。抗がん剤の全身投与では、用量が増えると白血球の減少、脱毛、吐き気、下痢などのひどい副作用が出ます。患者さんのQOLのためにも動注化学療法は役立っています」

年中ヒマなしという三浦先生、月曜日から金曜日までは病院に泊まり込みで連日の手術に立ち合っている。休養は週末の音楽会、サウナ、水泳、本屋めぐり、ワインという。好きな言葉は特にないが、「患者さんは教科書、患者さんから学んでいます」

所在地	埼玉県富士見市下南畑3166
電話	049-254-7111 (代表)
FAX	049-254-2707
診療科目	内科、消化器科(胃腸科)、循環器科、外科、化学療法科、皮膚科(6科)